

第2回 水環境委員会活動報告（植林班、ダム班、活動を広める班）

森の未来（植林班）

石松義彦・日野健二

小野加寿美・岩木千穂美

<年間活動報告>

H19.3 水の森の会 千倉植林作業等

H19.3 NPO初島森林植物園ネットワーク

釜ヶ瀬子供の森見学

H19.9 NPO初島森林植物園ネットワーク

丸山子供の森草刈作業

今、地球温暖化が急速に進行しています。日本の国土の66%が森林といわれていますが、人間の快適さ、利便性を求める経済発展に伴い、乱開発が繰り返され森の持つ本来の機能が失われてきました。世界では、日本の森林面積の80%とも言われる広大な森林を毎年破壊してきました。原因として、燃料用木材の過剰な採取、大規模な農地・プランテーションの開発、不適切な焼き畑農業の増加、森林火災、違法伐採などが挙げられます。この結果、経済発展に伴うエネルギーの大量消費により、植物に吸収蓄積される二酸化炭素を超える量が大気中に排出され、地球温暖化を進行させているのです。

このまま温暖化が進行すると100年後には世界の気温が5.8度上昇し、海面水位は平均50センチ、最大で1メートル上昇するとも予想されています。また、温暖化の影響によりマラリア等の感染症が増加し、現存の植物種の構成が変化し、森林生態系が破壊されるなど様々な影響が生じる可能性が指摘されています。

森林は、土壌の働きにより雨水を貯え、きれいな水をゆっくりと安定的に流し出しています。近年、森は人が手を入れなくなった事や、自然災害のために、荒廃化が進行しているところが増えています。森は自然のダムとも言われ、私たちの生活になくてはならないものであり、ましては人の手により壊されるなど許される話しではありません。

我々、聖陵会でも昨年より広葉樹を植林する活動を行ってきました。私たちが、後世に少しでも人の暮らしに優しい環境が提供できれば、と思い地道な活動を行っています。

日本は、世界有数の森林国といわれており、しかも国土が南北に長く標高差も激しい。気温や雨量も適度なので針葉樹から広葉樹、太い木から細い木、高い木や低い木と様々な種類の木が、いろんな形で入り混じっています。

<針葉樹の森>

一般に針のように細い葉が付いた木のことを針葉樹といいます。中にはうろこ状の葉のものもあります。カラマツを除けば杉、ヒノキ、クロマツ、アカマツ、エゾマツなどいずれも常緑樹で、冬も葉をつけます。針葉樹の原生林は、中部地方の亜高山帯や東北、北海道に見られます。しかし、最近の針葉樹の森はほとんどが植林されたもので、中でも一番多く植えられているのが杉で植林される木の4割を占めます。次に多いのがヒノキで水に強く、香りもよく虫がつきにくいという特徴があります。ヒノキは育てにくい木ですが、近年ますます植林が勧められています。

<広葉樹の森>

針葉樹に対し、葉の広い木の仲間を広葉樹と呼んでいます。広葉樹の森はふつう、天然林といって、親の木から落ちた実が自然に芽を出し、大きくなったも

のが多く、ミズナ、ケヤキ、ブナ、トチなどのように、秋に紅葉して葉を落とす木を落葉広葉樹とか夏緑広葉樹といいます。又、カシ、クスノキ、シイ、ツバキなど、冬でも葉を落とさない広葉樹を照葉樹とか常緑広葉樹といいます。

3月里山植林班は昨年につき「水の森」の会、財津忠幸さん協力のもと、千倉ダム周辺の植林及び環境の整備に参加しました。当日は風が強く肌寒い1日でしたが、天候に恵まれ小さな子どもや県外からの参加者など、30名程で作業を行いました。松や杉などの針葉樹からクヌギなどの広葉樹まで7～8種類程を、等間隔で肥料と共にダムに面した斜面に植林しました。他にもバードウォッチング用の観察小屋の修復や、椎茸のコマ打ちなど行い、午前中の2～3時間程でしたが、普段体験できない事ばかりで、自然と触れ合う充実した日となりました。



しいたけ



参加メンバー



植林作業



参加した子ども達



千倉ダムからの風景



植林作業

9月にはNPO法人、初島森林植物園ネットワーク神川建彦さんの協力にて「丸山子供の森」での草刈作業へ参加しました。これは「藪（やぶ）を森に戻そう」という目標の第一段階で、残暑の残る暑い一日でしたが、参加された方々が懸命に作業を行なった結果、藪もスッキリとなり森らしくなることができました。今後は、森へ戻すため木の実拾いと森林観覧会、採取した木の実の播種、植樹などを計画予定です。

<釜ヶ瀬>



センダン科 チャンチン



地元で取れた山菜



釜ヶ瀬溪谷

私達は森林の浄化作用により、綺麗な水や空気などの恩恵を受けています。地球温暖化により年々緑が少なくなり、木が伐採されてもその後、植林がなされずに荒廃が進んでいる所も有ります。植林をしても森に戻るには、数十年かかります。今後も私達、聖陵会 水環境委員会 里山植林班は、この緑のダムを守る活動に携わりたいと思います。

今年でまだ2年目の活動ですが、回を重ねる事でまた何か新しい発見や、勉強になる事があると思います。多くの人に参加していただき、環境についての大切さを理解していただきたいと思います。



丸山子供の森 草刈作業



丸山子供の森 草刈作業

水環境委員会 ダム班

メンバー 平将門 竹内康之（聖陵ストリーム）

河津渉 矢野二郎（聖陵岩里病院）

<年間活動報告>

- ・ 8月 第12回リバーフェスタにて環境ブース設置
- ・ 10月 小石原ダム建設事務所、建設予定地見学

私たち水環境委員会ダム班は今まで世界のダムの問題点や、また既に建設されているダム、建設中のダムの自然環境に与える影響や地域住民の方への影響を調査検証してきました。

今回は建設予定のダム（小石原ダム 福岡県朝倉市）の工事事務所の方に説明していただき建設予定地を見学してきました。

まずこのダムの概要と目的ですが、昭和55年の調査開始から昨年がいようの平成18年に総事業費1960億円もの予算を組み建設が計画されました。このダムの目的は

- ・ 小石原沿川の洪水被害の軽減
- ・ 福岡県南地域ふくおかけんなんちいきへの水道用水の供給
- ・ 適正な水利用や河川環境保全の推進
- ・ 異常いじょう渇水時に緊急水きんきゆうすいの補給ほきゆうとの事です。

そこで私たちはメンバーの思うところ、疑問に思うところを工事担当者の方に尋ね私たちの感想をまとめてみました。

最初に地域住民の方に与える影響としてどれだけの人が生まれ育った地域を離れるかと尋ねると3つの集落にまたがり36世帯の方が移動されるそうです。たぶん100人もの人たちがいろいろ想いの中移動する事になるのではと思いました。

ダム建設で自然環境に与える影響について調査してきた私たちは、このダムが自然環境はいいりよに配慮するであろう予定を尋ねたところ今のところ曝気循環ばっきじゆんかん施設しせつを設置予定ですがまだ調査段階で今後計画していきたいとのことでした。

環境に配慮するといっていながらその対策が十分になされないうちに、まず建設が決まってしまった事にとっても矛盾を感じました。建設ありきで事が進んでいるのではと思ってしまいました。

ところでこの小石原ダムは貯水量 4000 万 m^3 もの大きさがあります（世間でいう東京ドーム約 32 個分）。という事に私たちもびっくりしたのですが今建設中の大山ダムは貯水量 2000 万 m^3 ですから約 2 倍あるわけです！そんなに必要ですか？との質問に、水道用水に用いられるのは約 10 分の 1 の 460 万 m^3 。その他に洪水調節にこれまた約 10 分の 1 の 410 万 m^3 。その他は不特定用水？※1と呼ばれる河川維持用水と渇水時用に残りの約 8 割もの水があてられるそうです。福岡県南地区は説明では水道普及率が全国平均に 20%も少なく、その普及のためと言っておきながらちょびっとしか水道水に使用しないんです。
「いつまで私たちは井戸水を飲めばいいんじゃないー」と声が聞こえてくるように 思います。

※1 小石原川、佐田川及び筑後川の夏場の維持用水

しかしなぜこの筑後川はこんなにダムが出来るのでしょうか？作りやすい地形だからなのでしょう。今後もダム建設が続く可能性が高いと思い私達は聞いてみました。今後もダム建設事業は場所を変えて続くのでしょうか？

「その件に関してこちらからは何も言えないです。ダム建設は国と県で検討し決定されます」という返事でした。思った通りでこのままでは福岡県南地域の水不足を盾にダム建設事業が続く可能性が高いと感じました。

そもそも水という資源を人間がコントロールできるのでしょうか？世界ではダムによってコントロールするべきではないと言われています。江川ダム、寺内ダムと今回の小石原ダム、これらダムで福岡の水の供給や渇水対策でなぜダムが必要なのかという説明はしていただきましたが、しかしそれは人間本位であるとしか思えませんでした。この小石原周囲の生物、植物からの意見はど

うなのでしょうか？その声は届いているのでしょうか？

最後にダムを建設するという事で周囲の環境保全はもちろん、今後何百年にわたって影響を与え続ける事を十分認識してほしいです。またこの様な事が見過ごされてうやむやにならないように、この地球に生まれてきてそこで生活する私たちへの人類全体からの義務だと感じてほしいです。



ダムサイト建設予定中心部



水没地の風景



水環境委員会の活動を広める班

<年間活動報告>

佐藤多美枝 木村奈美子 原田由美

宮野日和 高倉智恵美 (左から)

平成19年8月 うらうちゅう8月号

「ビオトープについて」

平成19年9月 うらうちゅう9月号

「えひめA Iについて」

平成19年10月 うらうちゅう10月号

「ダム班活動報告」

平成19年11月 うらうちゅう11月号

「水質調査報告」

平成19年12月 うらうちゅう12月号

「委員長による年間報告」(冊子作成)

私達、水環境委員会は水環境の改善に向けて、幅広く活動しているにも関わらず、案外と聖陵会のスタッフがその内容を知らないことが多いのが現状です。その為に、聖陵会スタッフ向け広報紙「うらうちゅう」で、毎月水環境委員会の活動報告を行う事にしました。スタッフの方々が、ここで得た情報をもとに、日常生活の中で、自分なりの環境改善活動を行っていただければと願いました。一人の力は小さいけれど、その一人一人の活動がなければ環境は変わりません。未来を引き継ぐ我らの子供たちに、良い環境を残していく為、少しずつ取り組んで行きましょう！！

<ビオトープについて>

ビオトープ (Biotop) とはドイツ語です。英語では、バイオトープ (biotope) といいます。「生命・・・バイオ bio」と「場所・・・トポス top o s」の合成語となり、「生物の棲む場所」という意味で、鳥・魚・虫・花達の本来あるべき生態環境を意味します。森林や、湖、草地・河川・岩場など、その地域に住むさまざまな生き物が自然生態系を構築していればすべてビオトープといえるわけです。多くの自然が破壊された今、残された貴重な生物生息空間としてのビオトープを保全したり、消失した所を復元・創出することが重要な社会活動であると考えます。私たち、水環境委員会の活動である、河川清掃・せっけん洗剤の使用・植林・水質調査・えひめA i ・ほたる生息調査・アクリルたわしの推奨などの活動すべてが、ビオトープに関連づくと考えます。

(人工的なビオトープの一例)

これは、箱を利用した人工的な小さいビオトープです。箱の中は、水、メダカ、水草、小石があり、その周囲を自然の森林をイメージした石、木の枝、植物を置いています。小学校の自然環境教育の一環として作成する場合があります。*下の図は小学校で作成した小さなビオトープの一例です。



※第3回はえひめA I 2、環境班（筑後川の生き物たち）ホテル鑑賞会の活動内容をご紹介します。